

1. 本校の体験学習の経緯

本校は、児童数402名12学級、開校43年目の中規模校である。近隣の都立桜が丘公園や森林総合研究所で行う森林学習を柱とした、総合的な学習の時間における地域学習が特徴で、「意欲的にかかわる力・他者と協力し、活動する力・課題を見つめ、解決する力・自分の思いや考えを伝える力」を育てることを目指して学習している。

近郊には聖蹟記念館など歴史的な建物と共に、都立公園や森林総合研究所なども隣接しており、そこでは、専門家やボランティアの方が、雑木林や里山での昔ながらの営みを保護している。さらに、歩いて行ける範囲に、多摩川や福祉施設、商店などがあり、教育活動に協力的な方が多い。

体験活動を進める中で、児童が地域を大切に思う気持ちや人に感謝する気持ちが、日常的なあいさつや授業でのノート、作文などの場面で見られるようになった。そして教員は、児童と教員自身、さらには学級経営もが変化していくことを実感している。

2. 活動内容

地域の自然と関わる学習は、1年生から5年生までの5年間行う。特に、4年生は、主に多摩川で活動し、森林の湧水があつまって多摩川まで流れることを調べて川の学習を行い、川と森のつながりを考えている。5年生は、「連光寺 SATOYAMA プロジェクト」と題して、その流れの源がある地域の里山がフィールドとなる。里山（学校に隣接する都立桜が丘公園内の竹林や谷戸田、また森林総合研究所の森のこと）では、地域のボランティアの方々と谷戸田で稲作体験を行う。30kgほどの収穫した米は、収穫祭で保護者の方々がおいぎりにしていただき皆で頂く。また、研究所の先生方と生き物の調査や、炭焼きなどの里山の活動を行った。生き物調査の研究テーマは、樹木、キノコ、昆虫、イモリ、野鳥、ネズミ、タヌキなど、多彩である。里山全体の生態系を分担して調査し、まとめと発信を行った。今年度は、学校の森サミットで発表に機会をいただいた。また、全校児童会で他学年の児童にも活動を紹介している。

学校の里山は、森と生き物や、森と私たちの生活とのつながりを考えるための貴重な場所



森の中の水源調べ



谷戸田での代掻き



竹炭作り

となっている。

3. 研究内容

今年は学習活動の工夫として、児童の自己評価やESDで言われるホールスクール・アプローチについて研究を行った。ホールスクール・アプローチでは、学習活動以外の委員会や係活動などの特別活動や、保護者・地域との連携も含めた学校全体の活動としてESDを推進することにある。その中でも、以下の評価を中心に研究を進めた。

これまで、自然体験が中心で学びになっていない事が幾つかあった。児童主体の学びとしての森林学習を進めるためには、児童が考え判断し、表現する機会が必要である。このことは、授業の進め方であり課題となっている。児童主体の学びを支える取り組みの一つとして、児童による自己評価を行い、自分で何が分かったのか、どのような成長があったのかを、自分で発見することに取り組んだ。毎回の活動後に振り返りシートに活動内容だけでなく、感じた事分かったことを記録し、ポートフォリオにファイルした。

この自己評価によって、新しい発見や何が分からないのかなどの自己理解が進んだ。また、話し合い活動を通して、自分の考えを深めたり、自己理解を深めることが分かった。児童の中には「友達から質問をしてもらって、ちゃんと答えられない自分がいた。分かったつもりでも実は分かっていないことが分かった。」というメタ認知を深める記述を行った児童もいて、自己評価の必要性を実感した。自己評価は次期学習指導要領でも示されている取り組みでもある。



今後も、自己評価を実施して児童の主体性やメタ認知の獲得に努めたい。